

若松港軍艦防波堤 ～ 礎：3隻の帝国海軍駆逐艦 ～ <概要>

経緯と対象

日本帝国海軍の駆逐艦3隻の船体が、昭和23年9月、資材不足を補うため防波堤として、洞海湾入口に沈設・据付された。北側の響灘埋め立てにより防波堤の役割は減じたが、今でも「軍艦防波堤」として市民に親しまれている。ふね遺産の認定対象物件として、「軍艦防波堤」の礎となった、3隻の駆逐艦（「柳」、「涼月」（すずつき）、「冬月」）の戦歴・戦功ならびに防波堤の構成材としての貢献を称揚して、応募申請する。

「軍艦防波堤」の構成材として船体が再利用された3隻の駆逐艦は、「柳」（船長88.39m 基準排水量755t）、「涼月」（船長134.2m 基準排水量2,701t）、「冬月」（船長134.2m 基準排水量2,701t）であり、現在、駆逐艦「冬月」、「涼月」の2艦は護岸の中に埋没、駆逐艦「柳」は下部を埋没されているが、上部は船形視認可能な形で埋設されている。視認ができる数少ない日本帝国海軍の鋼製艦船である。

「軍艦防波堤」は、北九州市港湾局、北九州市“時と風”の博物館により、管理整備がなされている。

構成物件の実態と変遷

日本帝国海軍艦艇図面集等の文献資料を参考に、3隻の駆逐艦の戦歴・戦功、「軍艦防波堤」の実態と変遷について説明する。

北九州若松区の防波堤として用いられた駆逐艦3隻は共に、終戦時に九州に於いて健在であった。いずれも戦勝国への賠償艦として適当な状態ではなく、その船体は北九州若松港の防波堤として利用された。

昭和23年5月迄に佐世保にて上甲板より上の構造物を撤去され、7月には若松港船溜りに曳航された。若松港入港路西側には元々沖に向かって浅い砂州が伸びており、その砂州上に三艦が陸側から「柳-涼月-冬月」の順で一列に沈設された。「柳」と「涼月」は艦首を沖に向け、「冬月」の艦尾が沖側の最先端となる位置関係（陸側→←海側）にある。これを約400メートルの中核として、約770メートルの防波堤が建設された。

沈設当時の防波堤の状況を考えれば、外海（響灘）より大波が進入し、防波堤は消波に大きく貢献していたことが想像でき、その分、損傷も急速に進んだと思われる。埋め立てにより、大波の進入は少なくなったが、ある季節における特殊な気象状態の際に、東北東に開けた洞海湾口よりの大波の進入があり、軍艦防波堤に損傷を与える可能性は存在する。昭和36年台風による破損により船体部が大きく崩壊した。北九州市港湾局は修復工事を施行した。

昭和37年の台風災害復旧工事に、**「冬月」、「涼月」**両艦の船体はコンクリートによって完全に被覆されてしまった。「柳」のコンクリート被覆・充填範囲も拡大した。2000年に、「柳」について、コンクリートを流し込んだ部屋の仕切り鋼板が腐蝕して無くなり、コンクリートとのブロックに僅かな隙間が生じた数珠繋ぎの状態を修復するとともに、コンクリート被覆・充填範囲をさらに拡大した。現在、露出鋼板部の腐食はさらに進んでいる。

3隻の駆逐艦の戦歴・戦功は以下の通りである。

駆逐艦「柳」は、大正6年に建造された桃型駆逐艦である。二等駆逐艦としては初めてタービン推進を採用した。一等駆逐艦に勝るとも劣らない強力な兵装を備えた画期的な艦で、第一次世界大戦では第二特務艦隊（欧州遠征艦隊）に属し、地中海でドイツ潜水艦部隊と死闘を演じ、英国船団護衛として大いに活躍した武勲艦である。

桃型駆逐艦は新規設計がなされ、「柳」は、1915年（大正4年）に佐世保海軍工廠で建造された。船首楼の乾舷を高くしてフレアを増し、舷側に丸みを持たせて水はけを良くした。また船首楼を長くし艦橋も後方に置いた。桃型は船型と推進効率が良く、艦尾波が大きく立たないので夜戦に有利であった。また、兵装は魚雷発射管に3連装発射管を初めて装備し、2基6門を搭載して、当時の地中海における各国の同じ規模の駆逐艦の中で、最優秀であった。桃型駆逐艦の設計・建造は、『海軍船型研究所』の業務開始後である。昭和15年に除籍した。太平洋戦争中は、佐

世保にて係留され、主に旧制中学の軍事教練などに使用された。「柳」は第一次世界大戦中に地中海派遣の歴戦の艦であり、現在船形視認可能な鋼製艦船として残っており、貴重なふね遺産に選定される資格を有している。

駆逐艦「涼月」は、日本海軍の駆逐艦「秋月型駆逐艦」で、1942年三菱長崎造船所にて竣工し、「冬月」は同秋月型で、1944年舞鶴海軍工廠で竣工した。「秋月型駆逐艦」は、機動部隊に付随する防空・対潜任務専用の直衛艦として計画されたが、最終的に雷装も付加された。艦隊駆逐艦と異なる思想のもとに設計がなされ、長大な航続力、新型の10cm連装高角砲4基搭載された。日本海軍の対空火器の総決算と称すべき高性能を示す。日本帝国海軍が設計・建造した艦船の中でも、造艦技術的に極めて高い価値が認められる。

この両艦は昭和20年4月“沖縄特攻作戦”の戦艦大和の護衛艦として出撃し、大破しながらも奇跡の生還を果たしている。

駆逐艦「涼月」の艦長は戦闘続行不能と判断し、戦艦「大和」沈没後の14時30分頃から単艦で帰投を開始した。被弾により艦首が沈下（前方傾斜10度）、中央部も海面から甲板まで数十cmという状態で前進不可能であったので、後進にて、羅針儀、通信装置等亡失のもと、佐世保に帰着した。

駆逐艦「冬月」の艦長は、作戦中止命令の受領の後、艦隊の生存者救助活動にあたった。森下信衛第二艦隊参謀長、吉田満少尉以下「大和」生存者約100名を救助した。「矢矧」・「霞」の乗組員と併せて約600名以上を救助した。「冬月」は佐世保海軍工廠で修理後、関門海峡と対馬海峡方面の哨戒に服務した。9月20日付で第四予備艦となり、11月20日に除籍した。1946年（昭和21年）「冬月」は特別輸送艦に指定されたが、復員輸送に従事せず工作設備を搭載して工作艦となり、掃海部隊の支援任務に就いた。任務終了後佐世保へ回航された。

「軍艦防波堤三艦慰霊碑」が高塔山中腹に建立され、慰霊祭等がとり行われている。

意義と評価

歴史の節目節目に、優秀性能を付与されて建艦された3隻の駆逐艦は、日本の造艦技術の高さを証明するとともに、その戦歴も卓越したものがあり、また戦後日本の復興と平和繁栄の礎のために船体そのものが貴重な資財として防波堤となり現在も貢献し続けている。

2015年に「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録された資産の一つ「八幡製鐵所関連施設」の港湾が洞海湾にあり、軍艦防波堤が設置された場所は、響灘方面埋立以前の終戦直後、現在では想像できないほどの重要な意義と価値があった。防波堤自体は、土木学会より近代土木遺産2,800選に選出されている。

参考文献・資料

- 1) 松尾敏史著 『若松軍艦防波堤物語 ～戦いの記憶を語り継ぐ～』（公）福岡県人権研究所、2013年。
- 2) 澤 章著『軍艦防波堤へ 駆逐艦涼月と僕の昭和二〇年四月』（株）栄光出版社、2010年。
- 3) （社）日本造船学会（編）『日本海軍艦艇図面集』（株）原書房、1975年。
- 4) 上農達生：防波堤となった「涼月」と「冬月」、軍艦防波堤 若松 歴史群像、Part 4。



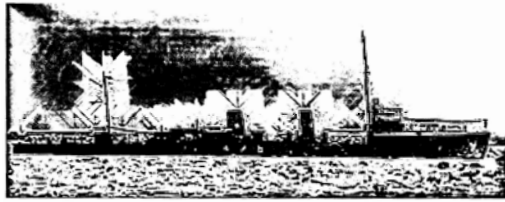
駆逐艦「柳」の視認可能部船形



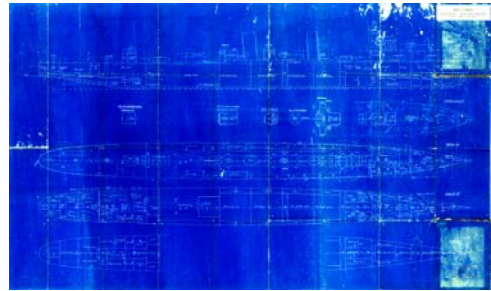
3隻の駆逐艦の埋設相互関係



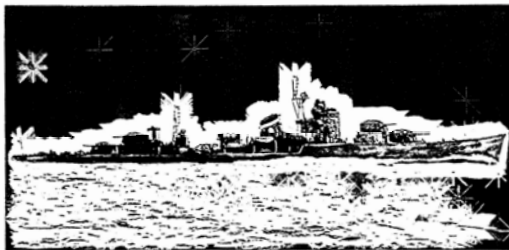
軍艦防波堤の修復工事風景



「柳」の同型艦「檜(ひのき)」(撮影データ不詳)



駆逐艦「柳」の一般配置図

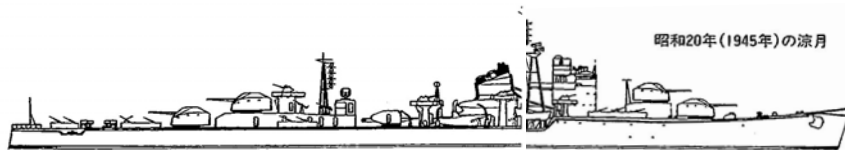


「涼月」(元乗組員 太田五郎氏提供 撮影データ不詳)



「冬月」(撮影データ不詳)

駆逐艦「柳」、「涼月」、「冬月」の写真



駆逐艦「涼月」の概略側面図

第002回国会 本会議第71号昭和23年6月26日(土)

○議長(松岡駒吉君) 連合軍から防波堤用としてもらい受けた軍艦の埋設作業に関する緊急質問を許可いたします。菊池義郎君。

○菊池義郎君 與党諸君の懇請もだしがたく(答声)とうとう出ましたのでございますが... (「総理大臣が見えたぞ、安心してやつてくれ」と呼び、その他発言する者あり) 連合軍からして、防波堤として沈めるようにと日本に與えられました艦艇、すなわち連合軍の戦利品となっておりました艦艇の処理に關しまして、同僚議員各位に訴えるとともに、關係各大臣諸公の御答弁を求めんとする次第であります。

終戦当時において、日本の艦艇は六百八十隻、八百万トンばかりあつたのであります。その中から連合軍がとつたのは、わずかに千トン級の駆逐艦、海防艦百三十五隻、それから沈めたものも数十隻ある。地方の連合軍が使つておりますものが十何隻ある、あとは全部日本に残つております。

..... この解体を命ぜられた軍艦の中から二十二隻もらうことができたのであります。すなわち防波堤として港をつくつてよらしいという許可が得られたのであります。これまた非常なる好意であります。その許可を受けました軍艦の名前を申しますと、碓、澤風、栢、竹、汐風、桂、鈴月、柳、夕月、美竹、おす、矢竹、春風、蓮、椿、潮、矢風、檜、第一迫浦、室津、海防艦九十五号、同五十七号等であります。沈める場所は、秋田縣に三隻、福島縣の小名浜に四隻、四國の高松に四隻、山口の宇部に三隻、八丈島に.....



福岡県若松港の防波堤にされた「冬月」(左)と「涼月」(右)の各船体。ここに「涼月」の撮影構図は簡易な構造の船体を示す船体の角度で、甲板シーアや舷側ツレアがほとんど平面で構成されているのが実によく判る(撮影＝朝長浩)。

防波堤となった 「涼月」と「冬月」

文・写真提供 = 上農達生

昭和二年七月の日中戦争に始まり、一六年二月の太平洋戦争突入、そして二〇年八月一日で日本は敗戦国となった。

八年間におよぶ戦争により日本全土の港湾は、新設・補修もままならず、港湾とその諸施設、防波堤等は荒廃したまま、小港湾では船舶の出入港にも危険な状態であった。

敗戦後、日本の支配者となったダグラス・マッカーサーの連合軍総司令部は、占領政策の一環として日本の各港および港湾の掃海と整備、築港、防波堤、棧橋、灯台標識等の整備、増設計画を立てたが、予算節約のため残存する旧日本海軍艦艇を防波堤として利用する事となり、在日米海軍司令部より一二隻の駆逐艦、海防艦が指定された。そして、戦時建造の最新鋭艦である秋月型の防空駆逐艦「冬月」と「涼月」が、旧式二等駆逐艦の初代「柳」と共に福岡県若松港の防波堤として沈設される事となった。

「涼月」は一七年二月竣工の歴戦の艦だが、「冬月」は一九年五月竣工で戦歴はないに等しい。また両艦共運悪く、「捷」号作戦直前に「冬月」が一〇月一〇日、「涼月」が一〇月一六日（宮崎沖にて雷撃で二度目の艦首切断、

二艦そろって米潜の魚雷攻撃で損傷修理中で、わが機動部隊期待の防空重衛艦二隻が比島沖海戦に参加できなかった。

「冬月」と「涼月」は、第二艦隊第二水雷戦隊の第四十一駆逐隊を二隻で編成、二〇年四月七日、戦艦「大和」を護衛して、軽巡「矢矧」、駆逐艦八隻と沖縄海上特攻作戦に出撃したが、米第五八機動部隊の艦載機群の攻撃を受けた。

「冬月」はF4Uコルセア戦闘機のロケット弾二発の命中を受けたが、幸いに不発で軽傷にとどまり、「涼月」はSB2Cヘルダイバーの急降下爆撃で、艦橋前部の甲板右舷に小型爆弾一発命中、大破口（長さ八メートル、幅四メートル）を生じ、艦橋の前より艦首が切断寸前の状態で後進にて北上、四月八日、生き残り駆逐艦四隻中、最後に佐世保着、直ちに入渠したがドックに入ったとたん沈没してしまった。

「涼月」は五月五日、一応修理がなり出渠したが、完全修復の見込みがないまま、防空砲台として佐世保市西方の相ノ浦に回航整備、七月五日予備艦に編入、同所で終戦を迎えた。

「冬月」は佐世保帰投後、入渠修理がなり、六月一日門司に回航、そこで終

戦を迎えたが、終戦後の八月二〇日、門司港内でB29の投下した感応機雷に触雷し、後部兵員室より艦尾切断、航行不能となり、その後兵装はすべて撤去し、同所にて作業艦任務（内海掃海隊の修理）に従事し、翌二一年秋頃に佐世保へ回航され同地に繋泊中であつた。

昭和三年一〇月一日、防波堤沈設のため艦体払い下げの通達があつた。「冬月」は三年三月一日より、佐世保船舶が上部構造物をすべて撤去する工事を五月三日に完了した。

「涼月」も三年四月一日より、佐世保船舶が上部構造物の撤去工事を五月三十一日に完了した。

「冬月・涼月」と共に防波堤に沈設される大正六年竣工の古い二等駆逐艦、初代「柳」（七七五トン）は、二三年三月三日より上部構造物撤去工事が開始され、四月三〇日に完了している。

「冬月・涼月・柳」の三駆逐艦が軍艦防波堤となっていく経緯と、その後の状況に関して、旧陸軍軍医大尉で大の軍艦ファンであった故・朝長溶氏が「日本の海軍」第四号（昭和五三年五月発行）に寄稿された「軍艦防波堤物語①（若松港）」という貴重な記事があるので引用させていただく。



手前の船首楼甲板が「冬月」、左が「涼月」。「涼月」の艦首上部は平面に近い。フェアリーダームボラードの流用のようだ（撮影＝朝長浩）。

「帝国海軍末期の花形駆逐艦冬月と涼月は余りにも有名である。初代柳は七七五トン、大正生まれの二等駆逐艦で筆者（朝長氏）が中学時代、魚雷発射訓練のため、僚艦桃、櫻、檜と共に大村湾に入ったので懐かしい艦である。昭和二二年に佐世保にあった三艦共、二三年三月～五月、佐世保船舶の手で上部構造物を撤去され丸裸になり、二三年六月から七月に北九州洞海湾入口の若松港船溜りに曳航されて来た。運輸省第四港湾建設局の手で、若松港入港路西側に防波堤七七〇メートルを建設する事になり、その中に三艦を埋め込んで、長さ約四〇〇メートルの中核を形成するというのであった。

三艦は柳、涼月、冬月の順に沖へ向かって一列に並べ、浅い砂州の上に喫水線はるか下方を水面下に沈めて沈座した姿は異様だった。

若松港名所軍艦防波堤と呼ばれ、若戸大橋下の案内図にも、三艦が一列に連なった姿が立派に描かれていた（現在もあるか？）。

私は昭和二三年暮れ初めて訪問、小舟を雇って現場に渡った。沖に艦首を向けた柳は、両側のコンクリートプロックから艦首楼上に立派な鉄の梯子が掛かっていた。やや離れて涼月の艦尾、



左が「涼月」。右の「冬月」は鉄物製のフェアリーダーの形状がよく判る。艦首旗竿は主柱も支柱も板材のように見える（撮影＝朝長浩）。

涼月の艦首左側に冬月の艦首が寄り添う如く並び、両艦首間は跨いで渡れた。冬月は艦首に三脚の艦首旗竿が残り、波に洗われる艦首下部喫水線付近を眺めていると、本艦はまだ生きていないのかと錯覚する程勇ましかった。艦体内部には岩石、土砂が一杯つめこまれ、涼月の上甲板は大部分コンクリートが張ってあるが、三艦共船首楼には入って行けて、その各室入口には室名プレートが残っていた。破損した管の冬月の艦尾がどうなっていたか、はっきりした記憶がないが、主砲砲座跡が明瞭な上甲板上には工事中木材が多数散乱していた。

昭和二五年に再訪すると、今度は埋め立てた土手伝いに歩いて行けた。艦体上端迄コンクリートブロックで囲いこみ、涼月と柳は船首楼のみがコンクリート上に露出し、冬月は船首楼のみ固定、艦体部は依然として水面上にあった。

軍艦防波堤は絶好の釣場で釣マニアが集まっていた。この頃から金属泥が横行、ガス切断器まで持参し船で夜襲する始末。三艦共完全に丸裸になり果てたので、防波堤の役目も果たせなくなるとして立ち入り禁止となった。周辺はコンクリートブロックで埋没され



埋め立てがほぼ完了した若松港の防波堤。手前に「涼月」が、向こう側に「冬月」が直列に埋まっている（撮影＝早田徹也）。

て行った。

昭和五二年一月二三日再々訪、若海変じて桑畑となるのたとえ通り、見渡す限り周辺、海面は埋め立てられ、若松港の岸壁は完成。冬月も涼月も完全に姿を消し、コンクリート埋立面を採しても、その痕跡だに発見し得ず。柳の残骸のみは容易に発見し得た。その残骸は全長約八〇メートル余、船首楼もなく、従って艦首上端の幅広い部分、錨孔、フェアリーター等全くなくなり、コンクリート面上に約一メートル七〇センチの高さの上甲板面と思われる艦体を露呈し、舷側の朽ちた肋骨の間から中につめた石塊、土砂等をのぞかせている。鉄板はポロポロに朽ち果て容易に剥げ落ちる。中央辺りから艦尾まで、艦上に厚いコンクリートの衝立状防波堤を成してあるが、艦の旧態は明瞭である。周囲の工事は一切完了しているので、本艦（柳）の状態はここ当分変わることはあるまい。

若松港の軍艦防波堤について、貴重な手記と撮影写真を「日本の海軍」誌に残していたた今では亡き朝長溶氏に厚くお礼を申し上げたい。

ともあれ、月日の経つのは速いもので、それから二二年が経過しているの

で若松港の「冬月・涼月・柳」が沈設された軍艦防波堤の現状は、さらに変貌している事と思われる。

本稿記述に当たり、上農達生編「日本の海軍」第三号の「若松港軍艦防波堤を中心として」（上農・葭英大氏）および前述の「日本の海軍」第四号の「軍艦防波堤物語①」（若松港）（朝長溶氏）を中心にとまとめた。掲載写真も「日本の海軍」第三、四号より朝長氏、早田徹也氏撮影のものを転載したものである。

最後に、軍艦防波堤となった残る一〇隻の艦名および指定港名を参考までに記す。

秋田県・秋田港⇨駆逐艦「柳・竹」、海防艦「伊唐」。福島県・小名浜港⇨駆逐艦「澤風・汐風」。山口県・宇部港⇨海防艦「三宅・第五十七号」、練習船「大須」（旧式駆逐艦、初代柿）。東京都・八丈港⇨駆逐艦「矢竹」（未成艦）。京都府・竹野港⇨駆逐艦「春風」。

その他にも海軍雑役船、一般船舶で戦後防波堤に利用された数隻がある。

（かみのうたつお・日本海軍を記録する六百頁）